■“言葉”と人類の進歩

この章の最初に、まづ掲げておくべきテーマがあります。それは、

「現代に於て、真に文字と言へるものは漢字だけである」

と言ふことです。

元々文字といふものは、発生するや否や消滅してしまふ言葉を保存するために発明されたもので、１語１語、言葉に対応して作られたものなのです。そして、さういふ文字は、今は漢字しか存在しないのです。

このやうな問題を、これからこの章で、もう少し詳しく見て行きませう。

1930 年以降、アメリカではチソパンジーに言葉を教へることを試みた学者が数え切れないほど輩出してゐます。彼らは人間の子供とチンパンジーを一緒にして、兄弟のやうに育てたのですが、チンパンジーはいづれも言葉が覚えられませんでした。といふ事は、「言葉は人間だけのものである」といふ事を証明したものと言へるでせう。

人類は、この“言葉”のお蔭で進歩が可能になり、万物の霊長の座に就くことが出来たのです。「三人寄れば文殊（もんじゅ）の智慧（ちえ）」と言はれるのも“言葉”があればこその事であり、その智慧を長い年代に亘って積み重ねて、今日の偉大な文化を築き上げることが出来たのです。これに対して、言葉を有たないチソパソジーには進歩が無く、今も百万年前の生活と全く変らない生活を続けてゐます。

然しながら、この“言葉”には致命的な欠陥がありました。それは「発生するや否や消滅してしまふ」といふ事と、「遠方に伝達することが出来ない」といふ事でした。ですから、重要な内容の言葉がふえて行くにつれ、これを記憶することが次第に困難になって行きました。その為、智慧の集積された偉大な言葉や重要な出来事を記憶して、これを次の世代に伝へる「語り部」といふ専門職が設けられた事もありましたが、それも無限に出来ることではありませんでした。